

共生のきずなを求めて!

NPO 現代座

2025 年 9 月 1 日 発行
(通巻 506 号) 定価 100 円

現代座レポート No. 103

- ・「武蔵野の歌が聞こえる」公演 (1)
- ・「遠い空の下の故郷」ハンセン病療養所に生きて (2~3)
- ・「星と波と風と」ビデオ上映会 (4)
- ・木村快との雑談会メモ (5)
- ・高齢者学級の講座が行われました (6)
- ・ハトノス『pica』東京-広島公演 青木文太郎 (7)
- ・お知らせ・会館日誌・会員入会・継続・寄付 (8)

NPO 現代座ホームページ <http://www.gendaiza.org/>

特定非営利活動法人 NPO 現代座 発行責任者：木村快

〒184-0003 東京都小金井市緑町 5 丁目 13 番 24 号 TEL 042-381-5165 (代) FAX 042-381-6987



出演 八木浩司・長谷川葉月・東志野香・木下美智子
ピアノ演奏 新井紀子

「武蔵野の歌が聞こえる」

11月30日(日)から12月2日(火)までの3日間、現代座3階小ホールで「武蔵野の歌が聞こえる」を公演します。

ピアノの生演奏による「歌のある語り芝居」で、武蔵野を協同の大地に変えた川崎平右衛門の物語を、四人の出演者が色々な役割を演じながら、歌い語ります。

私たちの住む武蔵野一帯は、江戸時代中期まで作物の採れない不毛の大地でした。

八代將軍徳川吉宗は、次々と起こった大地震と富士山の大噴火という大変な災害からの復興のため、荒地地だった武蔵野台地の開発を、大岡越前守忠相に命じます。

しかし日照りや飢饉の中での新田開発は困難を極め、何年たってもうまくいきません。これを成し遂げたのが、府中押立村の名主、平右衛門でした。平右衛門は農民の中に眠る「助け合いの心」を生かして復興を進めたのです。

「地元の話の芝居にしてほしい」と言われたのをきっかけに、地域の方と勉強会を重ね、2014年に、合唱構成劇「武蔵野の歌が聞こえる」を創り上げ、現代座ホールで公演しました。3年間連続で公演し、たくさんの方に観ていただきました。しかし、出演者も多く2時間近くかかる大作だったため、その後の公演は出来ませんでした。

しかし、今こそこの芝居を見てほしいし、地域の歴史を知る機会にもしてほしい。もっと気楽にたくさんの方に観ていただけるような新しい形は創れないかと、2023年から試行錯誤を続けてきました。

今回出演者4人の新しい「語り芝居」を創ります。会場も今回は3F小ホールですから、公演後は自由に語り合う場も作りたいたいと思います。どうぞ気楽においでください。

11月30日(日) 12月1日(月) 12月2日(火)

開演 午後2時 上演時間 70分

公演後交流会あり

会場 現代座会館 3F 小ホール 定員 40 人 予約制

参加費 一般 3000 円 小中高 1500 円

お申し込み

TEL 042-381-5165

FAX 042-381-6987

MAIL: gendaiza.ticket@gmail.com



「遠い空の下の故郷」

〜ハンセン病療養所に生きて〜

熊本地裁で「らい予防法違憲国家賠償請求訴訟」の勝利判決がでて「ハンセン病患者を社会的に隔離したことは国の大きな間違いだった」と小泉首相が謝罪したのは2001年でした。その時医療雑誌からの依頼で、木村快がハンセン病患者取材したことがきっかけで、熊本・鹿児島島の療養所で多くの方のお話を伺いました。知れば知るほど、この差別に気づかずにご過ごしてきた自分が情けなく、何かしなくてはと思うようになりました。

取材が終わってからも交流を続けて、何人もの友人ができました。そして表側からは見えなかった元患者さんたちの心の旅を知るようになりました。この友人たちの心の旅を、できるだけそのまま語って伝えていこうと、語りの活動を始めました。

2004年から、公民館の講座や学校の人権学習、お寺や教会など、色々なところで、阿部智子さんと山口トキさんが話してくださったことを語ってきました。

今年小金井にある東京学芸大学の環境教育の原子栄一郎先生から声をかけていただき、久しぶりに、教員養成課程で環境教育を学ぶ学生さんたちに聞いていただく事ができました。

改めて、これはわたし自身の問題として語り続けていかななくてはいけないと強く思いました。聞いてくださる方がいれば、どこにでも出かけて行きたいと思っています。

(木下美智子)

熊本市菊池恵楓園

阿部智子さんのこと



阿部智子さん
2001年
熊本地裁で撮影

智子さんは16歳の時療養所に入りました。けれどそこは病気を治す場所ではなく、高い塀に囲まれ、死ぬまで一生懸命働かなければならない所でした。

長い長い年月働いて、ある時、お母さんが亡くなった夢を見ます。三ヶ月後に判ったことですが、お母さんは本当にその時息を引き取ったのです。「母は別れを告げに来たのです。母は私のために差別され、苦勞をかけたのです。せめて息を引き取る時くらい、そばにいてあげたかったと泣きました」

その時、智子さんは自分が死んだ時には、故郷の家が見える山に散骨してほしいと思いました。そうすれば、灰が雨に溶け、子どもの時に遊んだあの大好きな川辺を流れます。お母さんと暮らしたわが家のそばを流れます。きっと心も自由になるでしょう。

子どもの時からどこへも行ったことがないので、広い海に出たら、魚のように自由に世界中を旅したいと思いました。

鹿児島県鹿屋市星塚敬愛園

山口トキさんのこと



山口トキさんと木下美智子
2008年
トキさんの部屋で撮影

トキさんは大正11年の生まれ、本当に可愛いおばあちゃんです。

昭和28年に起こった「らい病患者狩り」を逃れて山奥に隠れ、四年間一人で暮らしますが、ついに山狩りで見つけられてしまい、療養所へ入れられました。

療養所では病人や高齢者をおんぶして風呂へ連れて行く仕事をしました。トキさんは53歳の時、失明します。もうあの懐かしい故郷を訪ねることも、見ることもできません。

75歳の時「らい予防法」が廃止されました。けれど社会的差別はなくなりません。国の間違いをたえず裁判が起こった時、トキさんは「女のくせに」と言われながら、「女だからこそ言わねば」と原告の一人になります。

「わたしはもう目の見えない老人だけれど、裁判所で一生懸命お願いしました。国の責任で、どうか国の隅々まで、偏見を無くしてください」

魂に触れる「遠い空の下の故郷」

原子 栄一郎



原子栄一郎さん

20年以上前からの現代座会員

東京学芸大学で、環境教育をテーマに、学生たちとユークな授業をしている

真夏の太陽が照りつける7月10日（木）の午後、東京学芸大学で木下美智子さんと矢川千尋さんをお招きして「うたと語り 遠い空の下の故郷」ハンセン病療養所に生きて〜」公演会を行いました。サポーターとして、木村康恵さんも一緒にいただきました。

鑑賞したのは、小学校教員養成課程で環境教育を学ぶ2年生です。1年生の秋学期から、自分を棚上げにせずに、持続可能な社会を支えている教育を考え直し、その向きを変えようという現代環境教育の根本課題に取り組んできました。具体的には、持続可能な社会を象徴する典型的な事件である水俣病とハンセン病を題材にして、これらの問題にいろいろな立場から深く長く関わった「一人の人間」を取り上げ、その人に関する文字資料を読んだり視聴覚資料を視聴し、その時に感じたり思ったり考えたりしたこと、すなわち自分の心の動きと様子を丁寧に記述することを通して、自分がどのような人間であるかを振り返り見つめ直す作業を積み重ねてきました。その最後が、「遠い空の下の故郷」の公演でした。私を含め、一同、うたと語りに引き込まれ、心の奥底から揺さぶられました。

「劇によって被害者の声を聴くことで今までの授業より心が動かされたように思う。動画や文章よりも興味深いし、あつという間に終わってしまったなと感じた。」

語りの「声」が聞き手の心奥に届いた時、想像を超える出来事が起こります。そのあり様を、一人の学生はこのように記しています。ハンセン病資料館の見学や多磨全生園のフィールドワークを事前に行い、ハンセン病問題に対する知識がより深まっていたと思う。「しかしながら、ハンセン病問題の最大の被害者であろう患者の「声」を聞くことはなかった。もちろん今までの学習では本人による体験談を文章として読むできた。つらい経験、それでも前を向いて必死に生きる人々の姿をうかがい知ることは出来ていた。ただ、それはあくまで文章として読んだのであって、感情の移入などを余り感じることもなく、『大変だっただろうな』『力強い人だなあ』といった漠然とした、第三者としての感想が主であった。今回の授業は患者の生の声ではなかったが、現代座の方の「生きた」声を聞くことが出来た。その声はまるで患者さん本人の魂の叫びのように聞こえた。その声を通して、改めてハンセン病問題の深さを思い知ること、今までの学習を振り返ることが出来た。それだけでなく、自身が問題の当事者となり、今まで以上にハンセン病問題を振り返ることが出来たのではないかと振り返る。患者さんの「叫び」を自身の内面で受け止め、真剣に向き合い、当事者として考えられていたと振り返る。」



演奏・矢川千尋

語り・木下美智子



公演の最後に「赤とんぼ」と「ふるさと」を全員で歌いました。木下さんは、今の学生たちはこの歌を知っているだろうかと心配されていましたが、「赤とんぼとふるさとを歌ったことで、阿部さんやトキさん、そのほかの多くのハンセン病患者や家族の思いを感じた。全生園で見た望郷の丘とふるさとの歌が重なり、切ない気持ちになった。ピアノの演奏のおかげで一層ハンセン病問題に寄り添えた気がする。」と、感慨を覚えるひと時となりました。

小さい時、全生園の近くに住んでいた矢川さんは、入所者の家を訪ねた時の話をしてくださいました。「大人の人は私が出したものに口をつけない」という回復者の言葉を紹介くださり、偏見や差別の根深さに思いを至らせました。

「星と波と風と」 ビデオ上映会

6月28日(土) 29日(日) 午後2時から、現代座ホールで「星と波と風と」ビデオ上映会を行いました。

「星と波と風と」は1988年から1991年にかけて全国で公演をした生演奏のミュージカルです。この時代は創立して20年以上経ち劇団は転換期を迎えていました。20代の新人がたくさん入団してきた時期でもありました。彼らの力を生かそうと、若者がたくさん出演するミュージカルを創ったのです。

1980年代、バブル絶頂期の頃、若者たちも海外旅行に出かけられるようになりました。ミクロナシアの島に出かけた若者たちは、途中で船を乗り間違えて不思議な島にたどり着きます。一見楽園のように見える平和なジャングルで、彼らは全く予想もしなかった事態に直面します。その島はかつては日本の統治領であって、戦争で死んだ多くの日本兵の遺品が放置されていました。

そしてジャングルの奥には、今なお物質文明に抵抗し、自然な暮らしを守ろうとする人々の村があったのです。

「星と波と風と」はとても好評で、全国で191回の公演を行いました。毎年新しい出演者が舞台に立ちました。この作品で30人以上の劇団員が育ったのです。



今上演するのは難しくても、せめて映像でも見てもらいたい、現代座の歴史を知って貰いたいとビデオ上映会を企画しました。しかし、あまり映像は残っていません。結局1988年に静岡県島田市で公演した時に、実行委員が撮ってくださった家庭用ビデオの映像に、木村快が字幕を入れたものを見ていただきました。

集まってくださったのは、身近な現代座会員が多かったのですが、作曲家の岡田京子さんも参加するというので久しぶりに顔を見せてくれた方や、はじめて現代座の舞台を見るという方もいました。

2日間とも、上映後に輪になって語り合いました。芝居の中で若者が自分の国の戦争の歴史を知らなかったことを受けて「やっぱり教育は大切だと改めて思った」という意見や、「自分はずいぶんあの時代海外旅行に行っていた世代です。色々思い出しました」など、色々な話で盛り上がりました。



上映後は輪になって、自由に語り合いました



作曲の岡田京子さんと木村快

木村快との雑談会メモ

ぼくの育った時代と背景 木村快

木村快との雑談会は毎月行われています。8月に話した内容のメモです。



ぼくは昔から「ちよつと変な奴」と見られていたが、普通の人たちと比較すると、確かに特殊な環境で育ったと言っている。だからぼくの話は、真意が伝わらず、誤解を与えているかもしれない。

①戦時中の植民地育ち

ぼくは昭和11年朝鮮慶尚南道・大邱府生まれだが、早生まれなので、学校は昭和10年組だ。

小学校へ上がるまでは、父が大倉土木のスタッフとして各地に移動していたため、ぼくだけ祖父や叔父たちの住む大邱府に預けられていた。そこが木村工務店の本部となっており、職人達のたまり場にもなっていた。

周囲に同世代の子どもが居なかったため、言葉を覚えるのが遅く、「この子はオシなんじゃないか」と心配されたらしい。しかし、応接間には当時としては珍しいアメリカ製の電気蓄音機があり、人がいないときは自分で流行歌のレコードをかけ、一人で踊っていたという。

周りが大人ばかりだったので、父が狩猟のために飼っていたグレイファウンド犬と一緒に過ごし、「快がない」と心配されたとき、決まって犬小屋と一緒に寝てたらしい。

②時代的には完全な国民学校世代

1941年（昭和16年）、突然学校制度が変わり、従来の尋常小学校が「国民学校」という制度に変わった。

内地の学校なら教師が説明すれば済むのだが、住む人たちが絶えず入れ替わる植民地では新しい教師が派遣されて来て「これから日本は変わるのだ」とまくし立てるばかり。結局、新しい教科書など出来てこなかった。

そして「大東亜戦争」が始まった。これも戦後は占領軍の指示で「太平洋戦争」と記述されるようになったから、引き揚げ後はあの当時の雰囲気など思い出せない。

父は1944年（昭和19年）に突然召集され戦地へ。そして1945年（昭和20年）、敗戦になる。

◎九州・筑豊地帯へ引き揚げ

外地からの引揚者は統計によれば550万人以上だという。そのためどこでどの船に乗るかは、それぞれの本籍地単位に分類されていた。

木村の本籍地は広島市。一面焼け野原でなんにもないというので、母方の縁戚を頼って九州の筑豊地帯に引き揚げ。母子6人での流転生活。

小学校に臨時で転入させて貰うとき、「木村君は朝鮮から引き揚げて来ました」と紹介されると、放課後はみんなが集まって来て、「お前、朝鮮か。朝鮮へ帰れ！」と合唱された。筑豊は炭鉱地帯で、戦時中は朝鮮から多くの朝鮮人が連れて来られて働いていたからだろう。日本はひどい国だと思った。

◎広島市へ

1947年（昭和22年）にやっと父・木村斎（いつき）が硫黄島で戦死したという戦死公報が発行され、広島

市の寺まで遺骨を取りに来るようにとの通知が入った。行って見たら遺骨ではなく、位牌を入れた白木の箱だけで、山のように積み上げられていた。

広島の木村一族の間で、せめて跡継ぎとして、快だけでも広島で育てようという話になった。それでぼくだけ広島祖父の家へ引き取られることになった。

③新制中学

1947年（昭和22年）、義務教育の制度が変わり、それまで小学校を出るとすぐ働けたのだが、さらに3年間、中学に通うことになる。

ぼくの場合は一面焼け跡の広島市で中学にあがったため、教科書なし、教室なし。教師がいなかったので、旧制中学卒業者であれば代用教師として採用されていた。ほとんどが兵隊帰りで、乱暴な男達だった。最初の1年はただ出席をとるだけで解散。すべてほったらかしだった。

校舎が出来たのは2年生の2学期、広島市立幟町中学校として、かつての殿様、浅野公の庭園の一角を使って校舎が出来た。毎日適当なことをしていた。もっともこれは広島だけのこともかもしれない。だから、全くの無教育世代と言っている。



高齢者学級の講座が行われました

7月3日(木)午前10時から12時まで、現代座ホールで地元小金井市の公民館貫井北分館の高齢者学級「はなみずき学級」の講座が行われました。

小金井市ではこの公民館でも高齢者学級を開いています。内容は各公民館の企画実行委員の市民の方と公民館の担当者が独自に考えます。

昨年公民館貫井北分館の方に声をかけていただいて「演劇体験してみよう」という講座をやってみました。現代座に行ってホールの舞台に立って、照明を浴びてセリフを言ってみようという企画です。高齢者学級ですから90歳を超えた方もいらして心配しました。ところ



ろが皆さんすごく頑張ってく大きな声を出してくださったのです。「とても楽しかった」と言っていたらホッとしました。できたら続けていきたいな、と考えていました。

今年、「演劇体験してみよう」の講座を今年度もやりたいとご連絡をいただきました。昨年よりもっといい講座にしたいと、公民館の担当者と相談しました。台本も、もつと分かりやすい物にする事にしました。講師の長谷川葉月さんが、色々探して「地獄八景亡者戯」という落語にもなっているお話しを元に台本を作りました。現代座のメンバーも昨年より多くスタッフとして参加しました。

7月3日、暑い中を受講生の皆さんが続々と集まって来ました。人数は昨年と同じ30人ですが、高齢者学級は同じ教室を2年連続して受講することはできないので、初めての方たちです。ほとんどが現代座に来たことが無い人たちでした。

まず、簡単に現代座の紹介をし、さっそくベテラン俳優の黒澤義之さんの指導で、軽く身体を動かし、声を出してみます。そして6人ずつのチームを作りました。チームごとに集まって、自分たちが読む場面にあわせて、誰がどの役をやるかを決め、読んでみます。現代座メンバーがそれぞれのチームに入っているしよに稽古しました。

そしていよいよ本番。チームごとに舞台上上がって、台本を読みます。自分たちの場面を読み終えてホッと客席に戻ろうとすると、長谷川先生に「ちよっと待って！」と止められ、「とってもいいけど、ここはもっとゆっくり強調して」とかいろいろなアドバイスのあるのです。それを受けて再度やってみると、とっても良くなっています。それを見ていた次のチームは緊張したり、張り切ったり。見ている方も大笑いしたり、ハラハラしたり。とても盛り上がりました。

発表が終わった後、「小学校の学芸会以来はじめて舞台上立って楽しかった」とか「この役なら楽しかった」と思っただけ、別の役にしておけば良かったなど、皆さんの感想もとても楽しく、喜んでくださったことが伝わってきました。

地域の方たちと創造活動が出来るのは本当にうれしいと思いました。

(木下 美智子)



ハトノス『Pica』東京―広島公演

青木文太郎

2025年6月5-7月、ハトノス『Pica』東京―広島公演を実施しました。

ハトノスは私・青木文太郎が現代座の活動と並行して運営している演劇団体であり、これまで戦争などの過去の出来事と、それらの現代での語られ方に注目しながら「歴史と記憶」について扱った演劇を製作してきました。特に私の出身地である広島を歴史を扱うことが多く、今回上演した『Pica』は、「黒い雨訴訟」を題材に、原爆についての記憶を語る人、語りない人、語れない人、そうした様々な人々の姿を描いた群像劇です。2024年6月に現代座会館で初演を行い、様々な応援の声をいただいて、今夏再演すること

となりました。そして、再演をするにあたり、今回は東京だけでなく、「黒い雨」の記憶を持つ、広島という地でもこの演劇を上演したいと思い、広島公演も企画しました。

かねてから「ハトノスの広島公演」を望む声もいくつかはあったのですが、東京という地で広島についての演劇を上演することに意義を感じていたことなどから、私個人は広島公演にあまり前向きではありませんでした。広島には「当事者」がたくさんおり、その人たちに見られるということへの緊張感も当然予想していました。それでも、この作品ならば広島で上演できる、と思いい、広島行きを決断しました。

出演者も半分以上が旅公演は初めてというメンバーでしたが、東京でしっかり公演を重ねられたこともあり、落ち着いた雰囲気でも広島公演にも臨むことができました。高校生から「黒い雨訴訟」の元原告まで、様



↑ハトノス『Pica』舞台写真（広島公演）

々な年代の方々が集まった客席から感じる「劇を見る視線」も、東京の時より一段と前のめりなものを感じました。身構えていたところもありましたが、私が想像していた以上に、皆様に素直な視点で『Pica』という作品を見ていただけたな、と実感しています。広島で暮らすということは、原爆の記憶と隣り合わせで生きるということで、生活の中に「原爆」が少しずつ存在するからこそ、「原爆」への割り切れない思い、冷静な視点のようなものをいただいた感想から感じ、この地で、この作品を上演できてよかったと改めて思いました。

ハトノスとして初めての旅公演でしたが、様々な人たちに支えられ、何とか企画を完遂できました。広島では、「黒い雨訴訟」を追うフリージャーナリスト・小山美砂さんに、昨年に引き続きサポートしていただきました。現代座のメンバーも、東京・広島ともに様々な形で公演を支えてくださり、感謝しかありません。広島は地元ではありますが、演劇のホームグラウンドは現代座なんだと、広島劇場でしみじみ感じています。

この夏の経験は、私にとっても大切な時間となりました。出演者もスタッフもお客さんも、この公演にかかわった人たちにとっても、これから先、どこかで思い出すような時間になれていたらいいなと思います。

次は10月に、リーディング公演『始発まで』を行います。今までの作品に背を向けないよう、そしてまた広島という地で上演する意義のあるものを作れるよう活動を続けて行きますので、応援していただけると嬉しいです。

お知らせ

TEL : 042-381-5165
FAX : 042-381-6987

ハトノス・リーディング公演『始発まで』

脚本・演出○青木文太郎

出演：鈴木 千夏、環 幸乃、町田 大征、徳山 英伸、渡辺 啓明

＜公演日程＞

10月24日(金) 19時15分～

10月25日(土) 13時～/18時～

10月26日(日) 14時～



＜会場＞

現代座会館地下ホール

＜料金＞

一般…3,000円

学生以下…2,000円

(前売り・当日共通)



←ハトノスHP

公演詳細・予約など
こちらからどうぞ

ハトノスガリーディング公演『始発まで』を上演します。

『始発まで』は広島県の被爆復興電車、および現代でのその歴史を伝える取り組みを題材にした作品です。2023年に一般参加者を交え実施したリーディング公演を、新たな出演者と共に上演します。

前回同様、作中いくつかのセリフを読んでいたが、一般参加者を募集します。ハトノスの扱った「記憶」を様々な形で客席とも共有していくための取り組みです。ご興味ある方はぜひとも団体HPから詳細を確認いただき、お気軽にご応募ください。

現代座会館 6月～9月 活動日誌

6月8日 「現代座レポート102号」発送作業

18日 「木村快との雑談会」

28日 現代座会議

7月7日 屋上・駐車場防水工事開始

10日 学芸大・ハンセン病の語り

16日 「木村快との雑談会」

20日 現代座会議

29日 「平右衛門顕彰会」総会に参加

8月11日 現代座会議

20日 「木村快との雑談会」

第3木曜日「緑町ふれあいサロン」

【現代座ホール】

6月1～22日 「ハトノス」稽古・公演

28・29日 「星と波と風と」ビデオ上映会

30日 根本銀二監督・映画上映会

7月3日 「はなみずき学級」

4～14日 「ジャカバルズ」稽古

19～8月4日 「劇団アルファ」稽古

8月5日～10日 「パン・プランニング」稽古

13～17日 「劇団青うさぎ」公演

18～9月7日 「おぼろ」稽古

【三階小ホール】

6月2日8日16日30日 小金井女声合唱団

7月27日 津田リトルコンサート

7月20・29日8月20日 「ボフィー」稽古

隔水曜・木曜日 朗読教室

毎火曜・木曜日 3力教室

【二階サロン】

7月19日 緑町第2町会役員会

NPO現代座の会員になってください

- 年間4回発行の活動レポートをお送りします。
- 会員による企画行事をお知らせします。
- お申し出があれば、上演舞台の録画DVDをお送りします。

★年会費（現代座レポート購読料を含む）

一般会員 3,000円
 協賛会員 10,000円（1口以上）
 正会員 10,000円

郵便振替口座番号 00110-7-703151 NPO現代座